

2006年ヒマラヤ保全協会スタディツアー in ダバケル村

2006年8月19日～26日



ナグポカリ（蛇池）

目次

1.	はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・	p3
2.	ヒマラヤ保全協会とは・・・・・・・・・・	p4
3.	スタディーツアー参加者紹介・・・・・・・・	p5
4.	日程・・・・・・・・・・・・・・・・・・	p6
5.	ダパケル村あれこれ・・・・・・・・・・	p7
5.1	ダパケル村の位置	
5.2	ダパケル村の人口構成	
5.3	ダパケル村の生活状況	
6.	ファクトシートから一村で気づいたこと・知ったことー	p9
7.	ホームステイ体験記（佐久間雅俊）・・・・・・・・	p10
7.1.	降り立ってびっくりのバンダ	
7.2.	ダパケル村へ	
7.3.	ネパールの我が家	
7.4.	食べ物あれこれ	
7.5.	子供達と学校	
7.6.	白い山塊	
7.7.	トイレをめぐる事情	
7.8.	お別れの日	
8.	伝統と開発の狭間ー美観地区の提唱ー・・・・・・・・	p30
8.1.	伝統と開発の狭間で揺れ動くダパケル	
8.2.	「ナグポカリ美観地区」の提唱	

1. はじめに

特定非営利活動法人ヒマラヤ保全協会はネパールの山岳地域において森林保全・環境保全・生活改善・地域活性化プロジェクトを行っています。また、ネパールと日本の人々との相互理解を通して成長しあう「学びあい協力」の理念をもとにさまざまな活動をしています。

その一環であるスタディツアー、および山岳エコロジースクールは、私たち日本人がネパールの都市近郊あるいは山村に数日の間滞在し、その場所の人々の暮らし・文化・環境を楽しく学び、ネパールの現状の問題や良さを感じ取り、異なる文化を持つ人々との交流を通して成長することを目的として催されます。

本報告は、2006年8月に、8日間の行程として催されたスタディツアーの中で、首都カトマンドゥに近いダパケル村における約三日間の滞在の調査結果をまとめたものです。

2. ヒマラヤ保全協会とは

ヒマラヤ保全協会（The Institute for Himarayan Conservation：略称 IHC）は、前身であるヒマラヤ技術協力会（ATCHA）を引き継ぐ形で1986年に任意団体として発足し、その後 2000 年に特定非営利活動法人格を取得しました。全国約 250 人の会員を含む約 450 人の個人・団体の協力者によって組織されています。基本的な活動理念は以下のとおりです。

- （1） ヒマラヤ地域において、自然と文化が一体となった「風土」の独自性に基づいた、地域の人々を主体とした開発を支援する。
- （2） 前項の精神に共感する人々が、主体的に参加することで、学び合い成長できる場を作り出し、豊かで公正な地球市民社会のあり方を探求し提案する。

具体的には、ネパール王国ミャグディ郡・パルバット郡において、カウンターパート団体であるヒマラヤ保全協会ネパール（The Institute for Himarayan Conservation・Nepal：略称 IHCN）と協力し、村人の参画を得ながら環境の保全と、生活向上の両立を目指した村落開発を行っています。

IHC は「現地事情を一番よく知っている、村人から学ぼう」との観点から、「学び合い協力」を提唱しており、村人との徹底的な話し合いとフィールドワークによって、ニーズを総合的に把握し計画を立案します。

実施にあたって村人参加を基本に、現地の自然・人材・伝統技術などの地域特性を最大限に活用し、現地資源だけで不足している場合、IHC より専門家を派遣し、技術協力を行っています。その過程で村人自身の問題解決能力を高め、将来 IHC が事業を村人に引き渡して撤退した後も、自立的に運営されていくことを目標としています。そのため 1 年ごとの定期的なモニタリングや評価も村人が参加することによって行っています。

一方、日本国内では、環境や開発の問題をともに考え、よりよい地域社会を提案していく地球市民学習を実施する中で、市民・会員参加による組織の運営を行っています。

■ヒマラヤ保全協会ネパール（IHCN）について

IHCN はネパール政府（SWC）に登録されたローカル NGO です。主要メンバーはミャグディ郡に暮らすプン・マガール族を中心に構成され、村人を中心に理事が選任されています。事務所はカトマンドゥに次ぐネパール第二の都市ポカラにあり、ネパール人スタッフ 3 名が常駐しています。森林保全・生活改善のプロジェクト地となっている地域は、ポカラから徒歩 2～3 日の距離があるため、選任のフィールドワーク調査員が隔月でミャグディ郡・パルバット郡を訪問し、プロジェクトの進捗状況の確認や連絡、調整をしています。その結果は IHCN によってまとめられ、定期的に日本の IHC に送られています。

プロジェクト地では、村人によって構成された「森林委員会」「MF・チーズ委員会」「教育推進委員会」「文化保全委員会」などが中心になって、ボランティアベースで事業を行っています。

3. スタディツアー参加者紹介

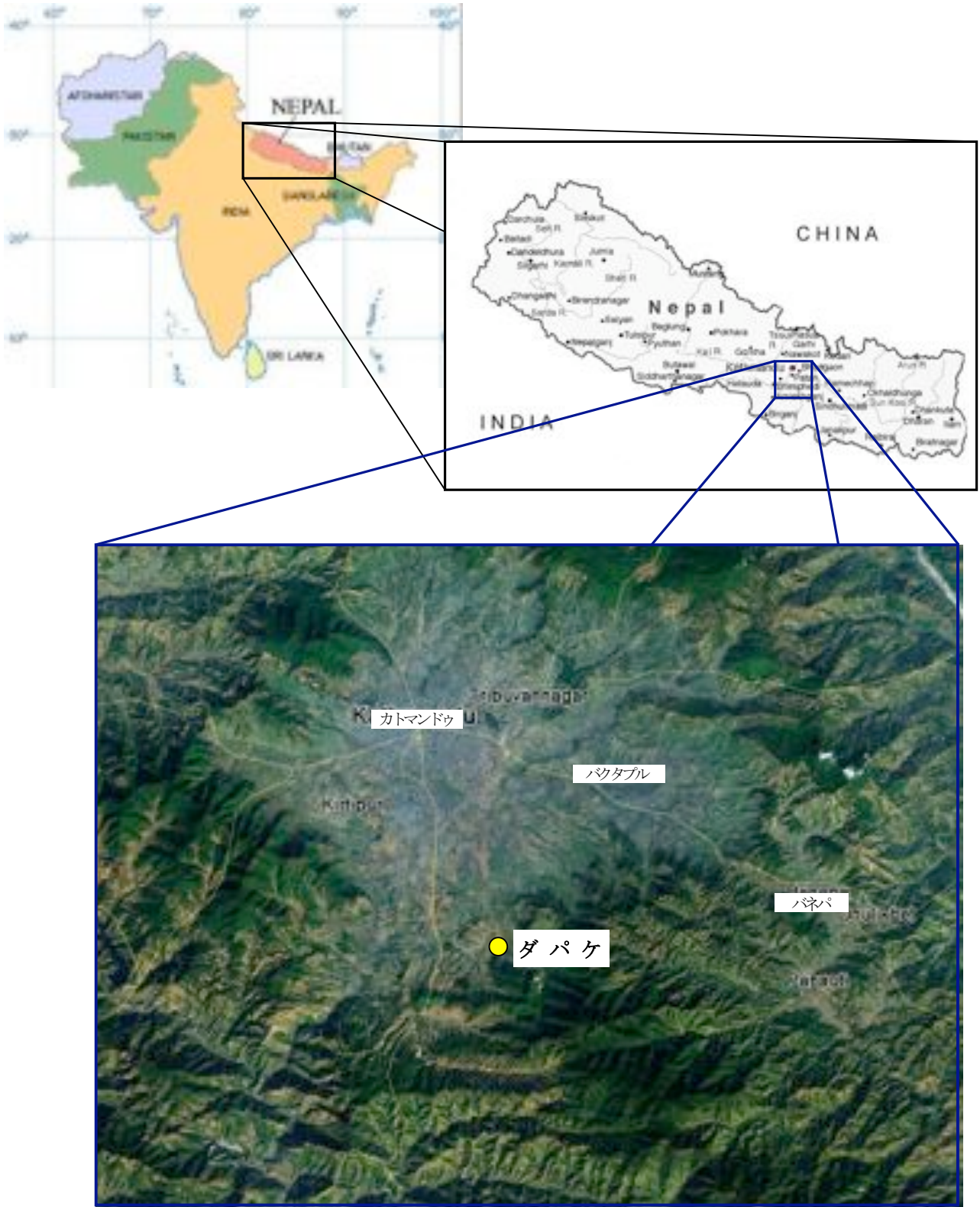
氏名	備考
M. M.	日本大学 生物資源科学部 国際地域開発学科 国際文化研究室 教授 特定非営利活動法人 ヒマラヤ保全協会 会長
T. T.	特定非営利活動法人ヒマラヤ保全協会 理事・事務局長
K. K.	日本大学 生物資源科学部 国際地域開発学科
K. E.	日本大学 生物資源科学部 国際地域開発学科
S. M.	特定非営利活動法人 ヒマラヤ保全協会 理事 株式会社 工学気象研究所
N. T.	特定非営利活動法人 ヒマラヤ保全協会 理事 松本大学 総合経営学部 専任講師

4. 日程

月日	午前	午後	宿泊地	備考
8/19	成田発	バンコク着	バンコク	集合時: T.T.、K.K.、 K.E.、S.M.
8/20	バンコク発	カトマンドゥ着 パタン観光	カトマンドゥ	M.M.合流
8/21	カトマンドゥから ダパケルへ移動	打ち合わせ・村内見学	ダパケル	
8/22	ホームステイ:学校訪問等		ダパケル	N.T.合流 M.M.帰国
8/23	ホームステイ:寺院見学等		ダパケル	
8/24	ダパケルから カトマンドゥへ移動	バクタプル観光	カトマンドゥ	
8/25	カトマンドゥ発	バンコク着:バンコク発	機内	T.T.、K.K.: パルバット郡へ K.E.: カトマンドゥに残る
8/26	成田着			N.T.、S.M.: 帰国

5. ダパケル村あれこれ

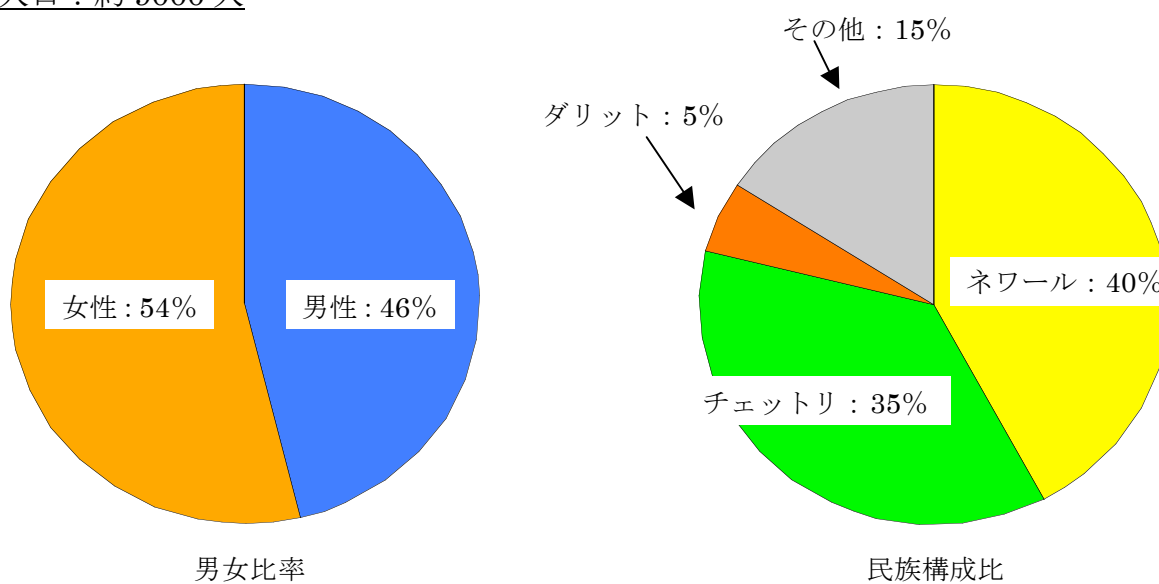
5.1. ダパケル村の位置



カトマンドゥ市街から南に車で 30 分、パタンより 15 分。
標高 1400mでカトマンドゥより幾分高い。

5.2. ダパケル村の人口構成

人口：約 9000 人



※ 民族・カーストについて

バフン：僧侶階級。最高位のカースト、ヒンドゥー教徒。

チェットリ：武士階級。第二位のカースト、ヒンドゥー教徒。

ダリット：低位カースト、ヒンドゥー教徒。

ネワール：カトマンドゥ盆地の先住民族、仏教徒。

5.3. ダパケル村の生活状況

ガス普及率 60%

チュロ（釜）40%

家畜保有率 22%

（昔は60%）

6. ファクトシートから —村で気づいたこと・知ったこと—

- ・ ダパケル村では、村人の 2 : 3 の割合で薪 : LP ガスが使用されている。LP ガスは業者が運んでくる。
- ・ ネパール族の中には数パーセントの仏教徒がいる。
- ・ 仏教とヒンドゥー教が混在している。
- ・ 10 年前は、村人の 65 パーセントが畜産に従事していたが、現在は 22 パーセントになった。獣医が少ない。
- ・ 子供たちの間（男）で、ネパール風が流行っていた。
- ・ 学校の先生は、カトマンズ・パタン・バドガオンから通勤している者が多く、ダパケル村出身の先生はいない。
- ・ ホームステイ先では畑を持ち、稲から野菜まで育て、自家消費している。
- ・ 家族は夕食後テレビを見る。子供がチャンネルをさわると、とてもよく番組を変える。
- ・ 見ていたテレビ番組：ネパール・コメディドラマ、ネパール・ドロドロドラマ、アメリカのアクション映画、その他。
- ・ 隣の人は会社のオーナー。16 人を雇っている。ホストファミリーは行政の仕事。両家とも家を新築している。
- ・ 自分達の生活は神とともにある。
- ・ 薪を使う古い型のかまどと、七輪のようなかまどと、ガス台があった。
- ・ 父の日には、早朝、お父さんにプレゼントが子供から渡された。
- ・ 家には 3 種類の水がある。井戸水、水道水、ミネラルウォーター。
- ・ お父さんがデジカメを入手し、電池がなくなったので買ってきたが、うまく動かない。
- ・ 電車が走っていない。
- ・ ネパール人は時間にルーズ。
- ・ 男の人はシャイらしい。
- ・ 文明がおくれているが、近代化がすすみつつある。

7. ホームステイ体験記（佐久間雅俊記）

7.1. 降り立ってびっくりのバンダ

8月19日成田発、タイのバンコクに一泊後、20日の昼にネパール入り。カトマンズ盆地のトリブバン空港に降り立ち、「ああ、前に来た時にみた同じ場所だ」と妙な感慨に。4年前のスタディツアーで初めてネパールに来た時は右も左も分からず、今回のように二度目があるとは考えもしなかった。



唯一動いていたツーリストバス

入国審査を経て荷物をとり、迎えが来ているはずの外へ出る。前に来たのと同じように、車乗り場は人ごみ……、だが勝手に荷物を持って金をねだる現地の方々があまりいない様子。迎えの方はいたにはいたのだが、車はきていないとのこと。実はこの日はネパールではバンダ（ストライキ）が起こっていてカトマンズじゅう車は走っていないと聞かされびっくり。

ネパール情勢はずっと王と議会とマオイスト（共産主義毛沢東派、ゲリラ活動をしている）との三つ巴の葛藤だったわけだが、今年4月には王は議会に権力を委譲したはず。それからは国王の力が弱まり、マオイストの活動も落ち着いて治安も良くなっていたはずだ。「それなのになぜ？」という思いがまずわいた。現地の人に聞くと「政府がオイルを値上げすると発表したのだからそれに反対して起こったものだ」とのこと。マオイスト活動とは直接関係はないらしい。でも、道路を封鎖し道端でタイヤを燃やし、デモの指揮を執るか裏で糸を引いているの人々はマオイストと関連があるのだろうか。そこは私には定かでなかった。

他の車が全てストップしている中で、なぜかツーリストバスなる小さめのバスだけが空港から市街まで動いているとのことで、とにかくこれに乗ってタメル（カトマンズ中心部の外国人の泊まるホテルの多い繁華街）までいくことに。ホテルに荷物を置いて、午後はバクタプルまで観光に行くつもりだったのだが、バスもタクシーも自家用車も全て麻痺しているためにこれは諦め、近めのパタンまで人力車で行っ



タメルの通り

てみることにした。

人力車は幌付き二人乗り座席のついた小さなリヤカーを自転車で引っ張っているといったもの。これでいくにはパタンは少々遠い。30分くらいはかかるだろうか。渋るドライバーと交渉し、やがて出発。車は全くないので道路の真ん中を堂々と力車は進む。普段は日本に負けないほど車が溢れかえっていて、マナー意識の違いか遠慮のないクラクションが絶え間なく飛び交っている場所だ。確かにこんな経験は滅多にできない。道端にはところどころに青めの迷彩服を着て銃を持った男達が立っている。後から聞いたところによると彼らは警察……日本で言うところの機動隊らしい。

「風が気持ちいいね～」などと言いつつ、カトマンズの中心部を走っていると、前方に迷彩服の男達の集団が道路の真ん中を陣取っている。剣呑な雰囲気だな、と思いつつそれを横目を通り過ぎる。もう少し行くと、今度は民衆が前方の道路の交差点にたむろしている。そして、なにかどよめいたかと思うと、一斉に何者かから逃げ出すようにどっと走り散開しはじめた。彼らは私達の方にも波のように走ってくる。人力車が慌てて180度方向転換し、全速力でペダルをこぎ出した。

緊迫感。日本で経験したことのない事態だけに、実際にはどれほど緊迫しているのかは分からないが、あの蜂の子を散らすように走り出した民衆達は、機動隊から逃げ出したのではないかと考えると、ちょっとドキドキする。

私達の人力車は横道にそれ、回り道をしてなおもパタンを目指す。と、今度は前方からデモの一群が行進してくる。道路いっぱいに広がり、前列の者たちはネパール語がかかれた長い垂れ幕をもっている。そこで人力車が道端に止め、デモが通り過ぎるまで待つこと



道端に機動隊



人力車にのる

に。彼らはスローガンか何かを唱えながら目の前を歩いていく。

それからまた出発したが、長い坂道にさしかかり、運転手がバテバテ。仕方なくそこで力車を降り、後の道は徒歩となって、無事パタンに到着した。

カトマンズ盆地は昔から一つの都市だったわけではなく、以前は都市国家の集まりだった。その中の三大旧王国がカトマンズとパタンとバクタプルだそうで、それぞれに中心部に王宮とダルバール広場がある。木と赤レ



パタン

ンガ造りの古い王宮やヒンドゥー寺院は過ぎた年月を雄弁に物語り、存在感がある。一方で現地の人が多いのだろう、道端に野菜や雑貨を並べて商売をする人々もいて、往来はかなりの人ごみ。エキゾチックな雰囲気満点である。

また、王宮建物内は美術館となっていて、ネパールの仏教やヒンドゥー教の神仏像や美術品を展示しており、これがまた素晴らしかった。

途中カフェに入って休んだりしつつ、やがて日が暮れ始めたのでタメルに引き上げることに。ところが当然タクシーはなく、それどころか人力車の営業時間帯が過ぎたようになかなか見つからない。やっとのことで見つけたには見つけが、足元を見られ、行きに払ったよりも高額で乗ることに……。まあ仕方がないだろう。

ホテルに戻って一安心したものの、明日もこのままバンダだったら、ホームステイをするダパケル村までどうやっていくのだろう。そう思っているところへ、バンダは今日で終わりだとの情報が耳に入った。政府が折れて、オイルの値上げを撤回したのだそう。ありがたいとは思ったのだが、一日のデモで政府の決定が覆るなんて……。オイルの値上がりは中東情勢も大きな原因だろうし、ネパールに輸入するときも誰かがお金を他国に払って買っているのだろう。それをネパール国内で安く売らざるを得ないとしたら損をするのは誰だろう。

7.2. ダパケル村へ

8月21日。朝、宿泊先のホテル、フジゲストハウスに、ダパケル村のジバンさん達が迎えに来てくださった。

ジバンさんは今回ホームステイをさせていただくダパケル村でのマネージメントをしてくださる。年は四十代だろうか。フジゲストハウスのメインスタッフで、日本語堪能、頼れる伯父さんといった存在感。電子機器など新しい物に興味旺盛な方のように、デジカメをもって、私達の写真等を撮っておられた。（もちろん私達も私達で写真は取りまくっていた。）息子さんと甥御さんは現在日本に留学しておられる。

また、村での拠点となるパドマ・ブラカッシュ・セカンダリー・スクールの前校長先生ディネスさんも同じく私達の世話をしてくださる。

迎いのワゴンにのり、タメルから南へ向かい、バグマティ川を渡り、カトマンズを囲む環状線のリングロードを越えて、30分ほどのドライブ。昨日とうって変わって町には車が

あふれ返り、絶え間ないクラクションが戻ってきていた。リングロードを横断する時、ジバンさんが言った。

「昨日はあなた達を迎えに空港へ行こうとここまできた。でも、ここで道路が丸太で封鎖されていて、止められてしまって迎えにいけなかった。」

風景も段々と畑がちになり、やがてダパケル村に到着。ダパケルはカトマンズ盆地の中でも少々標高が高い丘の上にあり、いたるところで振り返るとカトマンズの街並みと、ぐるりと盆地を囲む峰々が見渡せる。晴れているときにはもっと遠くのヒマラヤの山々が白く並んでいるのが見えるという。残念ながら 8 月はモンスーン期にあたり、雲が多くてヒマラヤは見えなかったが、青々とした水田の先に 茶色いレンガの街並みが広がる様はすばらしかった。



ダパケル村からみはるかす

村の（恐らく）メインストリートはアスファルトの道で、北のカトマンズ方面からゆるく上り坂になって南へと続いている。幅は日本でいえば路地くらいのもので、アスファルトはところどころ剥がれたり陥没していたりするが、路線バスや通学バスが時折クラクションを鳴らしながら通るくらいで、それほど車は見当たらない。道の両側は民家やその畑、商店、ヒンドゥーの祠がならび、人通りは多く、道端で休んでいる人もいる。

お世話になるパドマ・プラカッシュ・セカンダリー・スクールは、その道の途中にあり、ヒンドゥーの祠の横に建てられた集会場をもとにして作られたのこと。セカンダリー（中学校に相当）とはついているが、最近プライマリー（小学校）にあたる生徒も受け入れるようになったとのことで、実質は小学校のように見える。公立学校。レンガとコンクリートによる二階建ての建物で、現在も徐々に増築中とのこと。グラウンドなどは特にない。

私達が到着すると、水色のシャツに紺の下衣（ズボン、スカート）の制服を着た小さな生徒達が沢山列になって迎えてくれた。花道を「ナマステー、ナマステー」と挨拶しながら通ると、首にオレンジ色の花を重ねた首飾りをかけてくれた。生の花で作られた花輪なので触り心地は柔らかくしっとりしている。子供達はみな楽しそうで、本当に可愛らしい。「ナマステ」という挨拶は、胸元で両の掌をあわせるのだけれど、どうしても私はそのときに心もち頭を下げ



パドマ・プラカッシュ・
セカンダリー・スクール

てしまう。別にぺこぺこする必要はないのだが、日本人のさがというものだろう。

屋内にはいり、これからお世話になる村の方々とお互いに自己紹介をし、それからホームステイ先の家庭を割り振ってもらった。私達六人（この日は五人で、中澤さんのみ翌日に合流）は一人ずつそれぞれ別の家庭にお世話になる。



野の花

私の泊まる家は、メインストリート横の谷を降りたところ、周りの家々に比べるとかなり伝統的な雰囲気のある建物だった。家の主は前述の小学校の委員であるバサンタ・バハドゥールさん。もうすぐ還暦に届くお年だが、同居しているものだけでも孫が五人いるので、ここでは敬意をこめておじいちゃんと呼ばせていただく。学校の会議室で初めておじいちゃんを紹介された時は、ちょっとコワモテにみえて緊張した。上手くやっていけるのかしら…。でも実際、家に案内してもらい、

ベッドのある部屋を指して相好を崩し「Your room!」と浅黒い顔に白い歯をのぞかせておっしゃった顔をみると、気さくな方なんだなとほっとした。

とりあえずは部屋に荷物を置いて、他のステイ先をまわりつつ村内を見学。小さな黄色とピンクの花の超ミニ紫陽花のような房を作る植物がいたるところにあり、この小さな房の中での二色の小さな花の配置が房ごとに異なっているのも、とても不思議。現地の人にこの花の名を聞いたのだが、誰も彼もが「『花』だよ」というだけで名前は知らない様子。日本では全く見かけない花だが、ここではごく当たり前にありすぎて誰も気にも留めないのだろうか。

また、菩提樹の木はいたるところにある。ハート型の葉のとんがった先つちよが糸みたいにひょろっと伸びているのが特徴的。道端にたったその巨木にはよく何か文字の書かれた看板がつけてある。なんだろうと思っていたら、なんとこれはバス停の印なのだそう。このバス停標識は旅行者には見分けがつかないのではあるまいか。でもなんだか、おおらかな感じがする。

ある家ではふかしたトウモロコシをいただいた。このトウモロコシ、見かけは日本のトウモロコシと同じ。白っぽい皮に髭、つやのある黄色い粒々。だが、食いついて



菩提樹のバス停



軒先のトウモロコシ

みると少々違う。味そのものは同じなのだが触感が異なっていて、日本のものみたいにぷちんと弾ける感じがしない。芋のようなモソッという感じなのだ。もしかしたら、日本のトウモロコシも、昔はこういう味だったのだろうか。今はどうやらトウモロコシの収穫が終わったあとの時期らしく、レンガの家々の窓からトウモロコシの束が沢山折り重なって垂れており（最初見たときは沢庵にする大根を干しているのかと思った）、また玄関先にも山積みになっていた。

メインストリート沿いにも、そこから横に伸びる無数の小道の先にも、沢山の民家がある。特に通りに面したあたりの家々は、昔ながらのレンガの家ではなく、見かけヨーロッパ風のしゃれた色つきのコンクリート造りのものが多く見受けられた。小道を横に入ればレンガ色の家は多く、多くはコンクリートとの混合になっているようではあるが、レンガだけの年季の入った家は私の目には非常にエキゾチックに見える。各々の家には庭がついていて、多くは畑があり、牛が草を食んでいた。その中にサイバーカフェ（インターネットサービスを提供する店）が建っていて、首都近郊なのでそう不思議でもないのだが、牧歌的な風景の中にも現代的な技術の先端があることが少し不思議な感じがした。

みんなの家を回り終わると、この村の人々の憩いの場である ナグポカリに立ち寄ることに。ナグとは蛇の尊称、ポカリとは池。つまりは蛇池である。池の幾割かは蓮の葉に覆われており、残りは暗めの色をした水面。周りの水田で働いているものもいれば、釣りをしているものもあり、そして水着で泳いでいる男女もいた。池際の水面上には蛇を祭った 祠があり、また反対側のほとりにはヒンドゥーのお堂が建っている。後日ジバンさんにうかがったところ、このお堂はジバンさんの属するタパー族のみのお堂で、一族みんなでここ



近代的な家々



サイバーカフェ

にお参りに来ることがあるのだそうだ。ヒンドゥーを信仰する家はそれぞれ特定の神をまつていたり、特有のお寺や祠を持っていたりしているとのこと。この蛇池の近くには売店があったり、宿があったりと、周辺の人々のちょっとしたリゾート地となっているらしい。



ナグポカリ

7.3. ネパールの我が家

ダパケルの風景を満喫し、ツアー参加者は各自それぞれ自分の家へと戻っていった。私もおじいちゃんの家へと戻った。メインストリートを外れて谷へ降りていき、この数日の我が家へ近づいていくと、玄関では飼い犬のバンジョーが私を見つけ、小さな体にかかわらずものすごい剣幕で吠えたてた。

「バンジョー！ バンジョー！」と家の人々が怒り、奴を下がらせて私を家に招き入れた。ようし、この家から帰るまでに、こいつと仲良くなってやる。

ここで家の位置と構造の説明を少し。南北に走るストリートの東側は谷で、急斜面になって下っている。その下に我が家がある。



だから、通りの端に立つ菩提樹の根元に座ると、我が家を含む三四の家がかたまった集落が見下ろせる。周りは水田だ。この眺めの良い菩提樹は、ちょっと一服したくなる場所である。実際、現地の方がここに座ってくつろいでいるのをよく見かけた。

家は三階建て。一階の床はコンクリートだったが、二階は驚いたことに土間だった。一階の天井を見上げると、竹のような木材をくまなく渡してあり、その上に土を盛っ

て固めて二階の床としているようだ。一階は台所と、クリシュナ神の祭壇の間。他にも一つ二つは部屋があったが、その中を除く機会にはなかった。誰かの寝室なのかもしれない。



一階の玄関で仕事をするおばあちゃん

木造のはしごばい急な階段をあがった二階は、土間の居間を中心に家族の寝室が4つあった。それぞれの部屋の大きさは四畳半から六畳程度、居間も六畳はない。ここは十二人家族で各部屋の一つのベッドに複数の人が寝ているようだ。

居間には冷蔵庫とテレビと電話があり、電気も裸電球が一つついていた。各部屋や屋外のトイレにも一つずつ電球はついているようだ。夜は、特に子供達や若者が居間に集まってテレビを見たが、裸電球はとても暗く、テレビ自体も一つの光源になっていた。日本の家族と同じく、一階の台所での夕食の前後は、この居間でテレビを囲んでの家族団欒の図となった。もっとも、テレビのなかった頃は夜は家族同士の語らいの時であったのに、今はみんなテレビに集中してしまって会話がなくなってしまうという問題はあるようだ。また、テレビを見ている家族が妙に多いなと思って尋ねると、隣近所の子が混じっているとのこと。血縁のある一族がかたまて家を建てるならわしがあり、どの家の子も親戚で、自由に行き来しているらしい。ネパールには「いとこ」という概念がなく、日本の「いとこ」に当る人達はみんな「兄弟姉妹」である。

三階は作物の倉庫になっていて、トウモロコシが山と積まれていた。作物は大事なもの



二階の土間



三階作物倉庫



三階テラスにて

だし、保管するのに地面に近い場所より高いところのほうが衛生的にもいいのだろう。二階にもテラスがあったが、三階にもあり、隣り合った家や、谷に広がる水田が見渡せた。

この我が家にて手厚く出迎えてくれたのが、十二歳になるティナ嬢だった。十二人家族の構成は、一番年上が大祖母（七十代くらいか？）、そして家主のおじいちゃんとおばあちゃん（五十代後半）、その長男夫婦と次男夫婦（三十代前半）、そして八～十五歳の孫達五人となっている。ティナは、五人の孫達の上から二番目で長女的存在だ。（前頁下部右の写真の青服の少女。左は妹のソヌ。）

ティナは私が家に入るとすぐ、「村を案内してあげる」といって私をまた外に連れ出した。彼女は褐色の肌にぱっちり大きな瞳をして、整った顔立ち、それにとっても快活で自分がゲストのもてなし役であろうと非常に私に気を使ってくれ、そしてそれを楽しんでいるようだった。英語は非常に堪能で、むしろ私のほうが拙い。同居している英語教師の叔父（おじいちゃんから見れば次男）ダヤハリ氏に言わせれば、「まだまだだ」というところらしいのだが、意志の疎通はほぼ100%で何の問題もない。また、彼に「彼女は優しいいい子だね」と話すと「気が強くて困る」と少々苦笑い気味に答えた。

そのティナ嬢が友達の家連れて行ってあげるというので、ついていった。途中、大通りを離れて畑のあぜ道を行くとき、彼女は道端に咲いているきれいな花をさっと摘み、私に差し出した。このあまりにストレートな愛情表現に少しどぎまぎしながら、それを手に取りはしたが、こんな経験は初めてでその花のやりどころに困って、思わず自分の胸ポケットに差し入れていた。「ありがとう」と言うと彼女は恥ずかしげに「どういたしまして」と先に歩みを進めた。前述の黄色とピンクのミニ紫陽花を見かけて「この花が好きだ」と私が言うと、それもまたすぐに摘み取って私にくれた。

「サンキュー。」

「ユア・ウェルカム。」



道端の菩提樹

ティナの友達の家立ち寄り、しばらく談笑するとまた我が家へと戻った。途中、眺めの良い菩提樹の傍らを通ると、その幹に赤い顔料が塗りつけてあるのを見つけ、これは何かと私は彼女に尋ねた。それはティカなのだそう。

ティカとはネパールの人たちが額の真ん中につける赤い顔料のこと。これは幸運や健康を願うお守り・祝福といった意味をもつらしい。祈りの後などにつけるらしいのだが、これが人間の額にだけでなく、道端の仏像・神像や、犬や牛の額にまでついているのを頻繁に見かける。そして、それが植物である菩提樹にまでつけてあるのを見て驚いた。ティナの話によれば、菩提樹はヒンドゥーの神クリシュナの転生した姿であり、だからこれにティ



近くの祠にて朝のお祈り



神さま

力を授けるのだという。

これについては後にジバンさんよりもう少し詳しい話が聞けた。ネパールにはある行事のときに皆で読む「ソスタニ」という物語の本があり、それにこのクリシュナのお話があるとのこと。クリシュナは非常に女好きな神様で、少々お遊びが過ぎたらしい。その罰として、様々なものに転生して生きなければならなくなり、その中の一つが菩提樹なのだそう。実に人間くさい神様だ。

ところで、我が家族はそのクリシュナ神を主に信仰している。家の中の祭壇もこの神を祀っている。ネパールはヒンドゥー教と仏教がまじりあっており、それぞれの宗教を信仰する様々な民族がいて、このダパケル村ではヒンドゥー教徒のチェットリと仏教徒のネワール人が多くを占めている。私の家はチェットリである。チェットリとはヒンドゥー教徒のカーストの一つで、最高位のバフンに次ぐ第二位の階級。村にはバフンやそのほかの低位カースト（ダリット）も少数ながらいる。

私のほかの参加者については、田野倉事務局長がバフンの家庭に、他の方々は全てネワールの家庭に滞在した。バフンやチェットリのようなヒンドゥーの高位カーストになるほど、宗教的タブーが増えるらしく、私の家では酒は飲まなかった。また、肉を一切食べない

ベジタリアンでもあり、これについては

「クリシュナ神を信仰しているからだ」とティナが教えてくれた。同じヒンドゥー教徒でも、信仰する神が違えば事情は異なるらしい。ただしそれでも、シヴァ神の神聖な乗り物である牛は一般的に食さない。

家に戻ると、一階の祭壇の間に通してもらい、ティナとその妹のソヌにお祈りの仕方を教えてもらった。祭壇も大げさなものでなく、ちょっときれいにしている部屋といった感じで、近東の打楽器を専門とした音楽家で



祭壇の間で楽器を練習するダヤハリさん

もあるダヤハリさんが、ここで演奏の練習をしているところも滞在中に一度見かけた。

祭壇を前にしてひざまずき、それから腰を下ろして前に倒れ、その際腕は前の床にひじからつけて、額をそこへ持って行ってぴったりと床につける。起き上がって立ち上がろうとしたとき、ティナが何かを私の口元に持ってきた。口に含むと、それは甘いひとかけらのバナナだった。キリスト教の礼拝で口にするパンを思い起こさせた。

7.4. 食べ物あれこれ

田野倉事務局長の弁では、ステイしたバフンの家での食事と、たまたま昼食をご馳走になった北原さんのステイしたネワール家庭の食事とは全く味が異なっていたそうだ。ネワールは酒(ロキシ)も飲むし、ぜいたく品ではあるが比較的肉も食べる。食文化においてはヒンドゥー教徒よりもネワールのほうがバラエティに富んで豊かだという。



ダルバート

無論、バフンやチェットリでもネワールでも、基本は豆のスープ(ダル)とご飯(バート)の定食であるダルバートだ。チェットリの家での私の食事でも毎食ダルバートで、家のおばあちゃんが作ってくれた。

食事は一階の台所にていただいた。最初、靴のままで台所に入ったところ、脱いでくれといわれ、それ以後台所に入るときは靴は脱ぐようにした。台所は神聖な場所らしい。床はコンクリートで、私が座るところには座布団をしいてくれた。おばあちゃんが給仕役として、ダルとご飯、タルカリ(野菜の香辛料炒め物)、アチャール(漬物・和え物)を盛ってくれる。食事が進んで皿が空になってくると、おばあちゃんはどんどんと盛る。だから「プギョ(もう結構)」と言って止めないと、わんこそば状態でいつまでも食べつつけることになる。ご飯を沢山食べてもらうことがもてなしであるらしく、またネパールの人の方が多くの日本人より沢山の量を食べるようだ。私が「プギョ」と言うと、おばあちゃんをはじめみんな「もう終わりなの?」といった顔をする。

私はだいたい他の家族とは別に食事を取ったが、何度かはダヤハリ氏も一緒だった。「もう少しどうか」「味は大丈夫か」と尋ねる彼やおばあちゃんに、「プギョ(もう結構)」「アリアリ(少し)」「ミト・ツァ(おいしい)」「ピロ・ツァ(からい)」と知っている数少ないネパール語を総動員して答えると、「君はネパール語が話せるじゃないか」とお世辞をいただいた。

部屋の中には木のテーブルの上にガスコンロがあり、その横にプロパンガス、そしてかまどがあった。かまどは日本の七輪のようなもので、他の家庭にはもっと薪を沢山燃やせ



我が家の台所

る大きめのかまどがあるのだと思うが、この家では「このかまどの方が薪燃料が少なくてすむからいい」と言っていた。ガスと薪を併用しているのが現状のようで、薪は木の枝などのほかにも、トウモロコシなど穀物を収穫した時にでるいらない茎や葉、皮なども使っているとのことだった。

ネパール山岳地帯においては、こういった煮炊きの燃料や家畜の飼料採取のために村の近くの森林が激しく疲弊し、年々減少している。ヒマラヤ保全協会が行っている植林活

動も、こういった森林減少にともない遠方の森林から住んでいる村まで燃料・飼料の荷運びしなければならなくなって住民の労働が増えることを懸念して始まったものだ。もちろん、森林には保水や地すべり防止、生態系保護などの機能もあるから、様々な環境的な意味で森林を保全するのは大切なことである。

山岳地帯よりも都市近辺の環境の方が古くから改変されてきたはずで、近代化の波もいち早く届いている。その中の一家庭で、すでに「燃料として薪を取りすぎるのはよくない」という環境問題についての認識がしっかりあるのだということが新鮮だった。

我が家では台所は一階にあったが、他の家では最上階（三階）にあることも多い。ティナ嬢につれていってもらったネワールの家庭ではそうだった。食べ物・食べることは神聖で、高いところに保存する、高いところで食事するという考え方があるようだ。我が家でもトウモロコシなどの食物の倉庫は三階だったのは前述の通りである。

ネパールという国には沢山の民族がある分、様々な料理がある。その中でもタカリー族やネワール族、チベット系民族のものが有名で、カトマンズにはそういった民族料理の専門店がある。南のインドと北の中国（チベット）の影響が色濃く、マサラ（香辛料）をふんだんに使った、いわゆるカレー味系のものが多い一方で、点心（餃子）や麺、炒飯、炒麵（やきそば）といったものもある。

ただ、我々日本人も日本料理専門店で食べるような料理を日常的に食べているわけではなく、普段は毎食ご飯と味噌汁であるように、そういった店で供される民族料理を一般の家庭で頻繁に食べているわけではなくて、日常食としてはダルバートがほぼ毎日食され、他の料理が出てくることはあまりないようだ。逆に言えば、普通の観光旅行のレストランでは家庭的なダルバートを食べる機会



ネワール家庭の台所（三階）

はあまりなく、これを食べられるのはこのスタディツアーのホームステイでの醍醐味といえるだろう。

7.5. 子供達と学校



パドマ・プラカッシュの生徒達

前述のように、我々ツアー参加者のお世話をしてくださったのはパドマ・プラカッシュ・セカンダリー・スクールに関わっている村の方々に、打ち合わせや集合の場所としてこの学校を使わせていただいた。子供達は元気で、我々が姿を見せるとはにかんで微笑む子が沢山いた。ぶらぶらと周辺のヒンドゥーの祠を眺めて歩いていると、「マサトシ！」と私を呼ぶ声がして、振り返ると粗造りなコンクリートのテラスから青い制服を着たティナが手を振っている。

コンクリートとレンガ造りの学校はシンプルなつくりで、幼年～中学生くらいまでの生徒の勉強する小さな教室が7～8部屋あった。一部屋に入れる人数は15人程度だろうか。まだまだ部屋が足りないため、校舎の裏の水田に接する土地に新しい校舎を建設中とのことで、基礎工事はすでに始められていた。けれども、その予算が集まらず、工事はそこで中断しているという。

もっと良い環境で、多くの子供達に勉強をしてもらいたいというのが、大人たちの切なる願いだ。

8月22日、私達はこのパドマ・プラカッシュから十分程度歩いたところにある私立学校 GEMS (Graded English Medium School) を見学させていただいた。こちらも学年的にはパドマ・プラカッシュとは変わらないのだが、その門構えからしてかなり違う。大学のキャンパスのようだ。中に入ってみると、管理棟と手入れの行き届いた広いガーデン、西洋風の大きな校舎が三棟あり、教室も日本の学校のものとは変わらず、理科室や音楽室、図書室、コンピュータールームまでそろっていた。生徒達は寄宿舎に住んでいるようである。

カラー刷りの立派なパンフレットと、生徒達の詩や作文の作品集を渡され、その力の入れ具合に感心するとともに、公立のパドマ・プラカッシュとの歴然の差を感じずにはいられない。

こういった立派な私立学校に通えるのは



私立学校 GEMS

富裕な家庭の子供達だろう。公立学校は、それほど経済力のない家庭の子供達が通っているということで、だからこそパドマ・プラカッシュの先生方や委員会の方々は、学校の環境を何とか改善しようと頑張っておられるわけだ。彼らが日本の人々の支援を願うのも無理はない。

我が家の子供達五人はみんなパドマ・プラカッシュの生徒。13歳の長男マニッシュは、私の滞在中ずっと無愛想で、朝、一緒に学校に向かう道で二人きりになったときに「将来何になりたい？」と尋ねても、聞いているのかいないのかははっきりと答えてはくれなかった。六〜八歳の弟妹たちは英語があまりしゃべれず、ティナを通じて「何になりたいか」を尋ねてみたが、「まだ分からない、決めていない」との答えだった。そして、ティナ

に同じ質問をしてみると、彼女は「医者になりたい」と言った。「そうか、じゃあ科学を勉強しないとイケないね」と私は話した。どこの国でも、医者になるのは大変だろう。是非頑張ってもらいたい。

私達は、主に英語でコミュニケーションをとっていたが、ノートに絵を描いたり、英語や日本語やネパール語を書いて話したりもした。そういったティナのノートをぱらぱらとめくってみると、どうやら学校の授業の書き取りらしきものがそのページの多くを占めていた。私の見た部分では、何ページにもわたり環境と人口増加の問題について、英語で、青いボールペンのティナの文字で書き綴られていた。環境問題についてしっかりと教わっているのだと感じた。

先に食事のところでも触れたように、ここの人々は自分達の住む環境についての問題を、とても真摯に考えているように私には感じられた。近代化された日本で、お金さえ払えば電気やガスや水道がどこか知らないところから無限に供給し続けられると錯覚しそうな状況にいる私より、家族みんなでトウモロコシの皮をむき、乳を搾り、火を焚き、井戸水を



飼料を背負って運ぶ女性達



我が家の子供達

汲み、停電もある裸電球のあかりのもとで使いすぎに気を使って暮らしている方が、よほど環境に対する感覚が鋭くなるのではないかとさえ、思いもした。

近代化はこれからも急速にこの村の環境を変えていくし、それは必要なことなのだろうけれど、それに対処するだけの力をつける教育が、この土地の子供達に与えられてくれれば良いと願う。また、日本の辿ってきた道が必ずしも弊害を生まなかったわけではな

いだろうから、それとはまた違った近代化の道を、このネパール・ダパケルの風土や慣習と折り合う形で見つけていってもらえれば嬉しい。

村の人や子供達から、日本に対する憧れや褒め言葉を、何度か耳にした。私はそのとき「ありがとう」とは言ったが、反面、彼らが自分達の住む「世界」を気にかけているほど、自分が日本で住んでいる「世界」を気にかけているかどうか疑問に思うし、文化も気候も慣習も違い、欧米化・近代化の功罪が入り混じった「日本」を彼らが過剰に評価していないだろうかと苦く思ったりもした。

なににせよ、子供達には教育が必要なのだが、貧富の差、学習環境の差がネパール国内でも大きい。山村地域でもこれは大きな問題だろうし、またそこでは、教育を受けた人間ほど将来は山村を出ていってしまい帰ってこないという問題もあるようだ。これはこれからも考えていくべき問題なのだろう。

7.6. 白い山塊

当初はツアーの予定にはなかったのだが、ステイ三日目（23日）の早朝に、ジバンさんが私達のために、ヒマラヤ山脈を飛行機に乗って上空から眺めるマウンテン・フライトの予約を取ってくださった。カトマンドウの空港から飛び立ち、エベレスト付近を遊覧して同じ空港に帰ってくる短いフライトである。乾季である冬ならばヒマラヤはカトマンドウ盆地からくっきりと見える。だが夏は雨季にあたり、早朝に非常に天気によければ見えることもあるそうだが、基本的に雲が多くてまず見ることはできない。

私は冬にはネパールに来たことがないため、まだヒマラヤを見たことがなかった。だから、この思いがけない機会に喜んだ。無論、そのフライトの朝が晴れていれば、の話ではあるが……。

私と中澤さんと小林さんの三人は、まだ日が昇らぬ暗いうちにダパケルを出発し、カトマンドウの空港へ向かった。果たして、空は晴れていた。

乗り込んだプロペラ機はぐんぐんと高度を上げ、下層の薄雲を抜けてカトマンドウ盆地を後にし、やがて垂れ込めた灰色の高層雲の下に、たなびく煙のような筋雲をまとった真っ白い峰々が顔を出した。



マウンテン・フライト



窓から見るヒマラヤの山々

アテンダントにコックピットに案内され、フロントガラスの正面右の方向に白い山塊がどっしりと鎮座している。それがエベレストだと知らされた。出てくる言葉は「すげー！」だった。私と小林さんはこの言葉を連発した。「すげー！ すげー！」 なんとかの一つ覚えのように。

自分の座席に戻り、曇った窓から下をのぞくと、雲の合間に険しい緑の尾根が縦横に広がっていた。細長く谷間を走る川、点々と散らばる人家の屋根とおぼしき小さな四角。こんな山の中の尾根や斜面にも人が住んでいるのか、と驚いた。道路のようなものは見えない。だがそこには上空から見分けることができないくらいの細さの登山道のような歩道があるには違いない。



眼下の山麓

山塊が次第に大きくなってくるにつれ、下界の様子も険しさを増し、大きな氷の帯が目に入った。氷河だった。日本アルプスにも氷河が侵食してできた地形（カール地形）はあちこちにあるが、氷河 自体はすでになくなっている。登山のおりに、よくこれをみて本当の氷河ってどんなものだろうと夢想していた。それがこれだ。

言葉を重ねても、そのときの興奮を伝えることはできない。険しくとんがった 8000m 峰を前にして、あんなところに歩いて登ろうとするなんて、人間はなんて馬鹿な挑戦をするんだろう、と思った。あそこは人間の領域じゃない。と同時に、それをやろうとする人間はやっぱりすごい、とも。

機内を見渡すと、我々三人の日本人以外、すべて白人だった。ネパール人は一人もいない。それもそのはず、フライトの料金は、日本円で約 一万五千元、ネパール人の平均的月給の数ヵ月分なのだから。ヒマラヤはネパールのものであり、ネパール人の資産だ。それを、ネパール人自身が楽しむことができないとしたら、どうだろう。もちろん、東京にいるのに東京タワーに上ったことのない人はいるものだが、彼らは上ろうと思えば上れる。

ジバンさんは、何度かこのフライトを経験したことがあるそう。そのすばらしさを認

めているし、だからこそ私たちに勧めてくれた。彼のようにこのフライトを経験することのできるネパール人は少ないだろう。将来、ネパール人がしようと思えばこの楽しみを味わうことのできる時が来ることを願いたい。

わずか 1 時間の飛行でカトマンドゥにもどり、朝食の時間にはダパケルの我が家に戻った。ティナに「どこに行ってきたの？」と尋ねられ、思わず「カトマンドゥに」とだけ答えてしまった。

7.7. トイレをめぐる事情

私はこのダパケル村滞在中、腹を壊した。ホームステイ初日（21 日）の夜、ベッドに入ってから、その症状が現れた。お腹がぎゅるぎゅると鳴り、少々痛む。次の日（22 日）朝起きて、トイレに行くと水のような下痢。

その日は私立学校 GEMS の見学をし、中澤さんの滞在家庭に招いていただき、その後ティナのお友達にシヴァ神の祠へと案内してもらったのだが、機会があるごとにトイレに駆け込む始末。家に帰ると腹が「ぎゅるる〜」と鳴りっぱなし。ダヤハリさんが「マイ・フレンド、大丈夫かい？」と心配してくれる。

このときはまだ大丈夫だと高をくくっていて、「やばい、何かに当っちゃったよ」と冗談交じりに言っていた。



シヴァ神の祠

「水を沢山飲んだほうが良いですよ、できればスポーツドリンク系を」という田野倉事務局長の勧めに従い、日本からもってきたポカリスエット 粉末をミネラルウォーターに溶かしてかぶ飲みしたり、胃腸薬を飲んだりしていた。

次の日（23 日）の早朝はマウンテン・フライトで、飛行機に乗る前に一度空港のトイレに寄り、そのあとの搭乗中はなんとか無事に過ごした。しかし、再びダパケルに帰ってきてダウン。村の子供達の案内で少し遠くにある寺院へと遠足に行く予定だったのだが、体が思うように動かず、家で休養をとることにした。

日本から持ってきた胃腸薬は効かないらしく、おじいちゃんとダヤハリさんからネパールで使われている薬をいただいた。そのまま日中をベッドの上とトイレ とを往復しながらとうとうと過ごした。子供達が部屋の外で騒いでいると、大人たちが彼らを叱る声が聞こえてきた。「病人がいるんだから静かになさい」とでも言っていたのだろう。

夕刻になり、随分と体調は回復してきたものの、ダルバートは少々重く、腹に入れることを考えただけで気がめいるので、夕飯は遠慮しようとその旨をおばあちゃんに伝えた。するとおばあちゃんは「ザウロ？」と尋ねてきた。ティナに聞くと、ザウロとはネパール版



我が家の裏口を出たところ
奥に水場、左の建物がトイレ、右が牛小屋

おかゆのことだった。ダルバートと同じ味付けで、豆のスープで米を柔らかく煮込んだようなものだった。これならちゃんと食べられた。

こんなわけでトイレには非常にお世話になった。我が家のトイレは家の裏口を出たところに別棟としてあった。その傍には湧き水か井戸から水をひいてタンクにためている水場があって、家のおばさんがよく洗濯物をしており、また飼っている牛のための牛小屋もあった。この牛から絞る乳をもって、カト

マンドゥまで売りにいくのだそうだ。

トイレは日本にも古くからあるいわゆる「ぼットン」式便所で、糞尿をためる穴の上に便器の穴のついた床板を渡したものだ。便器の傍には水を汲んだタンクと手桶が置いてある。トイレトペーパーはない。用を足したあと、この手桶に水を汲んで、その水で直接お尻を洗うのだ。この際使う手は必ず「不浄の」左手であるらしい。ネパールでは食事を箸やスプーンを使わず、そのままの手でつかんで食べるが、この際使うのは右手のみだ。片手だけで食べるのは慣れないと不便だが、汚れたもの専門の左手を使わないのには衛生的な意味があるのだろう。トイレに行く機会が多かっただけに、このことは実感として感じられた。



飼っている牛

国際線の空港や外国人向けホテルの客室のトイレにはトイレトペーパーがあった。しかし、国内線の空港のトイレにはなかった。カトマンズの繁華街ニューロードのデパートのトイレにもなかった。ただ、中澤さんのステイしたダパケルの新築でしやれた家のトイレにはあった。これもまた、人々の生活の変化の兆しの一つなのだろう。少々苦しくはあったが、こんな風にいろんな場所のトイレの様子を見られたのは、腹を壊したおかげかもしれない。

確かに日本人からみると生の手で汚れた尻を洗うことには違和感を覚えるかもしれないが、それはしっかり手を洗えば済むことだし、むしろペーパーを消費しないことは環境的には良いことだろう。ただ、そうは思えても、トイレトペーパー文化に慣れきっている私としては、ペーパーがとても恋しかった。

私が家の裏のトイレを出てくると、たいていソヌが外で待っていて、私に石鹸をわたし、水場のタンクからつながったホースから水を出し、手を洗わせてくれた。

「サンキュー」と私が言うと、いつも彼女は「ウェルカ〜ム」と照れるのか小さな声で答えてくれた。

7.8. お別れの日

いよいよステイ最後の日を迎えた。体調は随分と回復し、おじいちゃんをはじめ家の人々はほっとした様子。私が土間の居間でくつろいでいると、ソヌが数個の小石を持ってきて、それを使って一人で遊び始めた。石を放り上げたり、つかんだり、転がしたり、と素朴な遊びで「ガティ」というのだそうだ。やり方を教えてもらい、一緒に遊んだ。私にとっては初めてやった遊びだったのだが、あとで中澤さんにこのことを話したところ、日本のおはじきと同じ遊び方だということだった。ネパールの子供達はタコアゲなどもしていたし、日本と共通した文化があるようだ。



「ガティ」を教えてもらう

部屋で荷物をまとめているとティナが花びらを沢山のせた盆をもってやってきて、針と糸でその花びらをつなぎ始めた。どうやらそれはお別れのプレゼントとして私にくれるつもりのものであるらしかった。彼女はこの滞在中ずっと私に気を使ってくれ、歌を歌ってくれたり、踊りを踊ってみせたりしてくれた。私はネパール語が分からないため、その歌が何を歌っているのかは分からなかったけれど、日本や欧米のものとは異なる節回しのネパールらしい歌だった。彼女が私にも歌を歌ってくれというので、お返しに日本の「涙そうそう」を歌ってあげると、彼女はじっと聴いていて「いい歌だね」と評した。彼女は踊



おじいちゃんとおばあちゃん

りがとても上手く、その手つき身振りは真似しようとしてもとても私には難しそうだ。それなのに、彼女は私にも「踊ってみせて」とせがんだ。困って固辞しつつしばらく押し問答をしていたところ、おじいちゃんがティナに用事を言いつけにきたところで中断したので、彼女には申し訳ないが正直ほっとした。ネパールの人々は本当に歌や踊りが好きなのようだ。

そろそろ家を出ようというころ、おじいちゃんとおばあちゃんが私のところにやって

きて、お別れの儀式として私の額にティカを施してくれた。そして首には先ほどティナが作っていた花輪をかけてくれ、さらにネパール風の帽子（トピ）や腕輪など、こんなにもらってもよいのかと思うほどのお土産を手渡してくれた。私の方から贈ったものは、日本から持ってきた風鈴くらいのものであったので、ちょっとつりあわなくて恐縮する。それ以上に体調を心配してくれたおじいちゃんやおばあちゃん、村を案内してくれたり遊んでくれたティナをはじめとする子供達、毎晩私と日本やネパールのことについてノートに英語やデバナガリ文字（ネパール文字）や絵を描いて話し合ったダヤハリさんとのやりとりが、私にとってはとてもいい宝物になった。

私は短い間ではあったがネパールでの家族であったみんなに別れを告げ、ほかのスタディツアー参加者と落ち合うために学校へと向かった。学校ではお世話してくれた村の皆さんと最後の会合をもち、我々の滞在費として家族に渡された心ばかりの謝礼が、すべてこのパドマ・プラカッシュ・セカンダリー・スクールの校舎建設費・運営費に当てられるとの旨を聞かせていただいた。ホストファミリーの皆さんは、本当に無償の親切を私たちに与えてくださったのだ。

ダパケル村はカトマンドゥに近く、村からの日本への留学生もいることから、これからもヒマラヤ保全協会と交流を持っていくことだろう。良い友人関係を保ち続け、お互いに学びあい高めあっていきたいと切に願う。

私たちはカトマンドゥへ戻り、その後帰国に備えて日本の家族のためにお土産を買いに町へ出たり、近くの古都バクタプルを見に行ったりと、自由に残り半日を過ごした。田野倉事務局長と北原さんは、このあと地方にあるIHCのプロジェクト地現地調査のためボカラに向けて出発し、他の者たちもカトマンドゥに残るもの、日本に帰るものと別れて、無事スタディツアーは終了した。みなさん、おつかれさまでした！



8. 伝統と開発の狭間 -美観地区の提唱-

8.1. 伝統と開発の狭間で揺れ動くダパケル

以上みてきたように、ダパケル村は、ネパールの伝統的な生活様式をのこしつつも、現在、開発がすすみつつあり、また外部から多くの人々が流入してきていることもあって、伝統はこわれ、環境も急速に破壊されつつある。つまりダパケル村は、古き良きネパールと新しいネパールが混在し、その伝統と開発の狭間で大きく揺れ動いている村なのである。

ところで、私たちがダパケルを訪れる前は、この村はチェットリ族の村という印象をもっていたが、実際にはほぼ同数のネワール族がくらしていた。特定の民族が多数派を占めるのではなく、複数の民族が混在・共存している。それはそのまま、ヒンドゥー教と仏教の混在、さらには融合といった宗教的側面にもあらわれていた。

しかし一方で、そのような民族構成や伝統文化とはまったくかわりなく、テレビに代表される現代文明が入り込んできている。これは、ダパケル村で暮らす人々の生活様式を大きく変えつつある。

このように、ダパケル村は伝統と開発の現実をじかに観察できる地域であり、それは発展途上国の縮図のようでもある。今回のスタディツアーは、伝統と開発あるいは開発と保全といった問題を考察するための絶好の機会を私たちにあたえてくれた。

8.2. 「ナグポカリ美観地区」の提唱

古くからの良い環境を守りつつ、この村の開発をすすめていくにはどのようにすればよいだろうか？

これは非常にむずかしい課題であるが、ここでは、「ナグポカリ美観地区」の創設を提唱したい。ナグポカリおよびその周辺部には、まだ、古い家並み・景観・環境がのこっている。そのエリアについては、徹底的に開発の手から守っていくのがよい。しかし、そのエリアの外では近代化・開発はやむを得ないだろう。

これは、ある区画（区域）を決めて、その中においては、景観もふくめて伝統や環境を完全に守っていくが、その外側では、開発をすすめる便利な生活様式を求めていくという方法である。たとえばネパールでは、バクタプールがそのすぐれた実例である。日本では、岡山県の倉敷美観地区が同様な例としてあげられる。

ただし、美観地区（伝統地区）と開発地区との間のどこに一線を引くかが大きな問題になる。また、美観地区で暮らす人々には、ある程度の生活補助をすることが必要になってくるだろう。そこで暮らす人々には、伝統的な生活様式をある程度まもってもらうことになるのだから。そのためには、美観地区に観光客に来てもらい、入場料をとってその費用にあてるというのもよいアイデアである。

おもしろいことにこの考え方は自然環境の保全にもつかえる。たとえばヒマラヤの森林において、今のこっている本来の原生林（自然林）は完全に元々の状態で保全しつつも、

集落に近いエリアには、住民の生活に直接役立つ「生活林」をつくりだす。「生活林」の育成のためにはヒマラヤの原種からなる樹種を選択する必要はなく、住民の生活を改善・向上させる樹種を選択する。「原生林」と「生活林」とは性格が大きくことなり、どこかで一線を引くことになる。

また、「原生林」と「生活林」の比較見学はエコツアーの絶好のツールになる。エコツアーからえられる収入は、原生林を守りつつ生活林をそだてるための費用としてつかう。

実際、ヒマラヤ保全協会は、このコンセプトに基づいてヒマラヤ保全活動を長年つづけているのである。

ダパケル村でも、「美観地区」と「開発地区」をつかいわけることにより、伝統と環境をまもりつつも、住民の生活を向上させるということは可能であるとかんがえられる。しかし、そうしないで今の状態を放置しておくと、ダパケル村はめちやくちゃになり混沌としてくるだろう。

2006 年ヒマラヤ保全協会スタディツアーin ダパケル村

2007 年 3 月 1 日発行

編 著 佐久間雅俊・田野倉達弘

発行者 水野正己

発行所 特定非営利活動法人ヒマラヤ保全協会

東京都渋谷区代々木 3-5-7-403 電話: 03-5350-8458